

信濃川自由大学オープンスクール 「源流・甲武信岳を訪ねる」を開催

信濃川河川事務所、信濃川下流河川事務所、新潟日報社では、信濃川ゆかりの著名人をゲストにお招きし、信濃川の自然や風土、歴史等を語り合う「信濃川自由大学」を月1回のペースで開催し、毎回、多くの皆さんにご参加いただいています。

この信濃川自由大学の課外活動として、去る8月5日～6日にかけてオープンスクール「信濃川の源流を訪ねる」を開催しました。当日は好天にもめぐまれ、約50名の受講生の皆さんが水源地ある長野県甲武信岳を目指してトレッキングし、源流域の豊かな自然を肌で感じながらさわやかな汗を流しました。途中、道が険しい所もありましたが、無事に日本一の大河信濃川の最初の一滴をその目で確認して感慨ひとしおといった皆さんの笑顔がとても印象的でした。



このような湧き水が源流となり、徐々に大きな流れに



標高2,150mにある千曲川信濃川水源地標にて

この様子を収録した番組「われら信濃川を愛する」がFM長岡など信濃川流域8局のFM局で平成18年10月上旬に放送される予定です。放送日時は各局で異なりますので、下記ホームページでご覧いただくか各ラジオ局の番組表でご確認ください。

信濃川自由大学URL <http://www.hrr.mlit.go.jp/shinano/367/jiyudaigaku/>
問合せ 信濃川河川事務所 河川環境課 TEL(0258)32-3257

信濃川水源地ツアー紀行概要

開催日：平成 18 年 8 月 5 日～ 6 日

行程：

1 日目	新潟駅 長岡 I C 飯山菜の花公園（飯山市） 昼食：おぎのや（長野市） 松代城（海津城）址 川上村（宿）
2 日目	川上村 毛木平（駐車場） ナメ滝 信濃川・千曲川水源地標 甲武信岳山頂 ナメ滝 毛木平（駐車場） 海尻温泉 長岡 I C 新潟駅

飯山菜の花公園において

〔千曲川の概要〕

千曲川・信濃川は全長 367km。うち千曲川（長野県内）は 214km ある。千曲川流域の面積は長野県全体の約 52%を占め（7,163km / 13,585km）、流域内の人口は約 70%(155 万人/222 万人)となっている。

千曲川の特徴として、長野盆地と飯山盆地の間、飯山盆地と新潟県境の間には、それぞれ川幅が非常に狭くなっている（狭窄部）箇所がある。

特に長野盆地と飯山盆地の間は、立ヶ花狭窄部とよばれ非常に狭くなっている。

千曲川における過去最大の洪水は、寛保 2 年(1742)に発生した「戌の満水」といわれており、その被害は死者約 2,800 名、全滅した村落数知れずという甚大なものだった。

近年では、当地飯山市で破堤し甚大な被害が発生した昭和 57 年 9 月（起因：台風）と昭和 58 年 9 月（起因：台風）の 2 年連続の洪水や、最近では平成 16 年 10 月（起因：台風）と今年（H18）7 月に大きな洪水が発生している。

今年 7 月に発生した洪水の特徴は、昭和 58 年 9 月に次ぐ大規模なものであるほか、台風ではなく梅雨前線に起因していることで、これは長野県内では非常にめずらしい。

〔飯山市概要〕

飯山市は、千曲川・信濃川の全長367kmのほぼ中間に位置している。

農作物は米やキノコ、アスパラが主で、全体の 8 割を占めている。

新潟県魚沼地方と気候や産業が似ており、長野県では珍しく豪雪地帯であるほか、とれる作物も米ではコシヒカリが栽培され、きのこ産業も盛んに行なわれている。スキーやカヌーもさかんである。

長野県と新潟県の県境に位置する関田山脈に、昨年「信越トレイル」が開通し、かつて信州と越後の人々の生活や文化を結ぶ交通の要所として、現在はブナの森をはじめとする豊かな自然や文化、歴史が残る里山として、総延長 80km の自然歩道（＝トレイル）が整備されている。

市内にある飯山城は、川中島の合戦の際の上杉方の最前線基地となっていた。

飯山市における千曲川の話題としては、今年の梅雨前線による集中豪雨により、かなり水位が上がり、越水（堤防を水が越える状態）寸前となった。

また、大関橋の上下流約 4km の区間は“さくらづつみ”となっており、シーズンには多くの市民によって賑わっている。

飯山菜の花公園は、5ha の野沢菜の菜の花が植えられ、春には一面黄色い絨毯が現れ、春の風物詩となっている。



松代城（海津城）において

築城は永禄3年ごろといわれ、翌4年には、武田信玄勢と上杉謙信勢による川中島の合戦が繰り広げられた。

城からは山本勘助の「きつつき戦法」の舞台になった「妻女山」も見える。

城の入り口には直角に折れ曲がった枡形(ますがた)のスペースが造られ、敵が一直線に攻められない構造になっている。また、出兵時にはこの枡形で隊列を整えた。

当時は城の脇を、「百間堀」と呼ばれていた千曲川が流れ、湿潤な土地であることから、膝まで沈む湿田が多く、川と田が天然の城壁となっていた。

一方で千曲川は、城内に水害を与えたため、当時の城主は河道を500m以上移動する工事（瀬直し）を行なった。現在、この旧河道は住宅地（海津団地）となっている

瀬直し後、千曲川の景観を利用し茶室がつくられた。

武田信玄や上杉謙信は舟運を活用し経済の発展にも努めた。このため松代城はじめ、長沼城や飯山城などは、物資輸送等の利便性を向上させるため川周辺に築城された。

海津城は、萱が生い茂っていた川湊（津）の意味から萱津（かやつ）城と呼ばれていたという説もある。



信濃川源流（甲武信岳登頂）をたずねて参加者の感想

「この水、1滴から、いつも飲んでる水までたどり着いているんだな、と非常に感慨が深かったですね」

「もう、最高です。あんなところで、水が沸々と湧き上がって流れてくるというのが、すごく胸が熱くなりました」

「これを人に語らねばならない。そんな感じですね」

「よかったです。信濃川の本当の源流が見れて・・・」

「初めてですね。きちんとしたのを見たのね。まあ考えてみれば不思議なもんですごいね」

